

労働者協同組合とは何か

—その今日的役割をめぐって

明野進

はじめに

か。

いまなぜ、労働者協同組合運動の問題をとりあげるの

労働者協同組合」「事業団」などの内外にかもしだされ
ている。

ここ数年来、協同組合のなかでの労働者と労働組合の
たたかいを、労働者協同組合には「雇う・雇われる関係
がない」「雇われ根性をのりこえた、だれにでもよろこ
ばれる仕事をすることが生きがい」などの理由で「無用
な対立」として、協同組合企業内の団体交渉を「有害」

運動とは「根本的に異なった」「企業の主人公」として、
事業・経営を主体的に行う「新しい型の労働組合運動」
を「日本の労働組合運動の主流にしよう」との主張まで
あらわれ、有力な研究者が、これらの風潮を助長する例
も目立ちちはじめている。

もし、労働者協同組合に「雇う・雇われる」関係がな
いとするなら、それは、労働組合が労働者の雇用をま
もるたたかいの一形態として活動する労働者協同組合運

動でなければならない。こうして労働者協同組合と労働組合とのあいだの協力共同の正しいあり方を追求する立場にたつとき、今日の労働組合運動と協同組合運動の一端に、そのように有害な影響をひきおこしつつある理論と思想の内容、その誤りの要点はどこにあるのか、などいくつかの問題がでてくる。

そこで本稿では、ある著名な経済学者の最近の著作の議論のなかから、つきの三つの柱にしづつて、検討してみたい。

一 「対外的反対・要求」運動の労働組合と、「内発的要求数足」運動の協同組合との「区分」はどういう実践的意味をもつか。

二 協同組合は、はたして、資本主義社会で「雇う・雇われる」関係を克服」したり、「資本と労働との対立を廃止する」などといふ役割が果たせるのかどうか。

三 協同組合運動の「偉大な実験的価値」「大きな功績」（マルクス）とはどういうことを意味しているのか。

労働組合は「対外的反対・要求」の組織か

この著名な経済学者は最近の著作（一九九三年四月

刊）のなかで労働組合と協同組合をつぎのように区別している。

「そもそも労働者協同組合は、大衆組織として、労働組合が「対外的反対・要求運動」の組織であるのに対して『内発的要求数足』の運動の組織である」（同書一七六、「序章」）。

そして「労働組合は、本来労働者階級の組織化の中核として、資本や国家権力にたいして労働者・労働組合の権利としての要求を実現させ、その権利の侵害に反対する活動をすすめる『対外的反対・要求運動』の組織である」（同書三八六）と説明する。

しかし、労働組合は、はたして「対外的反対・要求」だけの組織であろうか。

マルクスはいまから一二〇年以上前にも前に書いた、労働者階級の労働組合運動の最初の綱領的文書「労働組合一その過去、現在、未来」（一八六六年）のなかで「労働組合は、みずからそれと自覚せずに、労働者階級の組織化の中心となってきた」（傍点はマルクス、「マルクス・エンゲルス全集」（以下、全集）第一六卷一九五六、国民文庫「マルクス、エンゲルス 労働組合論」四六六）という「労働組合の過去」の事実をふまえたうえで

つぎのよつに指摘している。

「労働組合は資本と労働とのあいだの日常闘争……にとつて必要欠くことのできないものではあるが、賃労働と資本支配との制度そのものを廃止するための組織された道具としては、さらにいつそう重要である」（傍点はマルクス、「(イ) その過去」、同全集同一九五六一一九六六、同文庫同六）。

そして「(ロ) その現在」の項では、労働組合が「賃金と労働時間の問題に限られていた」「当面の闘争」のワクをこえて「一般的な社会運動や政治運動」に近づき「賃金奴隸制そのものに反対して行動する自分の力」「自分の偉大な歴史的使命にいくらか目ざめつつあるようみえる」（傍点は明野、同上書同六）として、イギリスとアメリカの労働組合などが、当時すでに民主主義のための政治運動に参加したり、それを支持した事実をあげている。

さらに「(ハ) その未来」の項では、「いまや労働組合はその当初の目的以外に、労働者階級の完全な解放といふ広大な目的のために、労働者階級の組織化の中心として意識的に行動することを学ばなければならぬ。……労働組合の努力は……ふみにじられた幾百万の大衆の解

放を目標とするものだ」といふことを、一般の世人に納得させなければならない」（傍点はマルクス、同全集同六、同文庫四七六）と指摘している。

したがつて、この本の筆者のよつに労働組合をこのような「対外的反対・要求」の組織と規定することは、マルクスがここで規定した労働組合のいわば「原点」の深い原則的見地を単純化してしまつ結果になるのではない。

か。

それにひきかえ、この本の筆者は、労働者協同組合を「本来働く者が出资し、労働して、労働者だけでなく農漁民・中小零細業者・消費者がその権利としての要求の充足をめざす事業活動をおこなう『内発的・要求充足』運動の組織である」（同書三八六）と説明したうえで、あとでみると、「協同組合運動は……資本と労働との対立を廃止するものである」（同書一二二一）とまで主張するのである。

2
協同組合も資本主義のもとでは擲取関係のなかにおかれている

マルクスは「資本論」第三卷三章「利子と企業者利

得」のなかで、資本家が労働者を「監督および指揮する労働」が資本家によつて行わることは「無用」になつてゐることを、協同組合工場が「証明」してゐるとして、つぎのように書いてゐる。

「資本主義生産そのものは、指揮の労働が資本所有からまつたく分離されて、街頭でいつでも手にはいるまでにした。それゆえ、この指揮の労働が資本家によつて行なわれるということは無用になつてゐる。音楽の指揮者は、オーケストラの樂器の所有者である必要はまつたくないし、また彼が他の樂士たちの「賃銀」になにかかわり合うといふことも、指揮者としての彼の機能には属さない。……資本家が生産の機能者としては余計になつたといふことは、協同組合工場がこれを証明している」(新日本新書、社会科学研究所版⑩六五五一六五六一、全集第一五巻(a)四八五一)。

そしてマルクスはこれにつづく、つぎのパラグラフでは、協同組合工場での「監督労働」の性格規定をその理論的根拠とともに、明確に示して、つぎのように書いてゐる。

「協同組合工場の場合には、監督労働の対立的性格はなくなる。といふのは、管理人は労働者たちによつて支

払われるのであつて、労働者たちに対立して資本を代表するのではないからである」(同新書六五七一、同全集四八六一)。

だが重要なことは、資本主義社会のもとでの協同組合は(したがつて協同組合労働者も)、全体としては、資本家が労働者を榨取するといふ資本主義的な榨取・被榨取の本質的な関係のワクのなかにおかれているという現実である。

したがつて、資本主義のもとでの協同組合は、その「対外的な」諸関係(たとえば今日の日本におけるような対米従属性の国家独占資本主義による支配と榨取・収奪の網のものもとにおかれた諸関係)においても、そこで働く協同組合労働者をとりまく社会的諸関係においても、資本家が労働者を榨取するといふ、資本主義社会の「経済的運動法則」(マルクス)がつらぬかれており、この「法則」の作用をさけてとおるわけにはいかない。

つまり、自分の労働力を売つて働いてゐる協同組合労働者の生活に「必要な労働部分」をこえる「剩余労働部分」が、資本主義社会の資本階級全体によつて榨取されるという基本的関係は、協同組合の内部でも、その「対外的」諸関係においても、さらに、雇い主がだれで

あろうと、「雇う・雇われる」関係があろうが、なかろうが、「消える」どころか、毎日にわたって不斷に、再生产されているのが現実である。

この本の筆者は、あとでくわしくみるよう、協同組合が資本主義のもとでも「雇う・雇われる」関係を「克服する」とか、「資本と労働との対立」関係を「廃止する」とか主張している。しかしここでみたような見地にたつとき、この主張が、資本主義のもとでの搾取関係をおおいからず役割をはたすものであることは、どうしても否定するわけにはいかない。

協同組合は「資本と労働との対立を廃止」するか

ところで、この本の筆者はその「終章」の「二 労働者協同組合運動の現代的課題と意義」のなかでつぎのように書いている。

「労働者協同組合運動の……現代的意義は……『雇う・雇われる』関係を克服し、この関係を生みだしていれる資本と労働との対立を廃止する」ということである」（傍点は明野、同書二二一—二二二頁）。

その根拠はなにか。著者は同じパラグラフのあととのと

ころでつぎのように説明する。

「協同組合運動は、……【階級敵対】に基礎をおく現在の社会を改造する力の一つであり」、その「大きな功績は、資本に対する労働の隸属にもとづく、貧困を生みだす現在の專制制度を、自由で平等な生産者の連合社会と、福社をもたらす共和制度におきかえることが可能だ」ということを実地に証明する点にある」とマルクスが指摘したように「雇う・雇われる」関係を克服し、資本と労働との対立を廃止するものである」（傍点は明野、同書二二二〔二〕）。

はたしてマルクスは、いつ、どこでそのように「協同組合は資本と労働との対立を廃止する」と「指摘」したのであろうか。

著者がここで引用しているのはさきにみた「労働組合——その過去、現在、未来」をマルクスがインターナショナルジュニア大会のために書いた決議案「個々の問題についての暫定中央評議会代議員への指示」（一八六年）という同じ文書にふくまれている「協同組合労働」の項のうちの「(イ)」のほん全文である」とはなしである。

ここでマルクスがふれている、協同組合運動の「大き

な功績」についてはあとでややくわしく考えてみたい

しているのである。

が、さしあたりここではマルクスがこの「協同組合労働」の項の「(イ)」の部分のすぐあとにつづく「(ロ)」の部分でつぎのように「指摘」していることを確認しておこうことが大事である。

「(ロ) しかし、協同組合制度が、個々の賃金奴隸の個人的な努力によってつくりだせる程度の零細な形態に限られているかぎり、それは資本主義社会を改造することはけつしてできないであろう。社会的生産を自由な協同組合労働の巨大な、調和のある一体系に転化するためには、全般的な社会的変化、社会の全般的条件の変化が必要である。この変化は、社会の組織された力、すなわち国家権力を、資本家と地主の手から生産者自身の手に移す以外の方法ではけつして実現することはできない」（傍点はマルクス、全集第一六巻一九四二、国民文庫『マルクス、エンゲルス 労働組合論』四四二）。

つまり、マルクスはここでは協同組合労働が「資本と労働との対立を廃止する」どころか、逆に、そういう役割をはたすことはけつして「できない」と、つまり、「労働者階級が国家権力をもぐる「以外に」資本と労働との対立を廃止する「方法がない」というとを「指摘」

協同組合工場では「資本と労働の対立は止揚されている」（マルクス）

この本の筆者は、「第五章 「雇う・雇われる」関係を克服する」のなかで、マルクスの「資本論」第三巻第七章「資本主義生産における銀行の役割」から、つぎの部分を引用している。

「協同組合工場の内部では、資本と労働との対立は止揚されている——たとえ最初には、組合としての労働者たちが彼ら自身の資本家であるという、すなわち、生産諸手段を彼ら自身の労働の価値増殖に使用するという、形態においてにすぎないとしても」（傍点は明野、社会科学研究所版⑩七六三—七六四二、全集第二五巻(a)五六一—五六二）。

ここで使われている「止揚」という言葉の原語はドイツ語の「アウフヘーベン (aufheben)」で、一方では「廃棄する、否定する」、他方では「保存する、高める」という、一通りの意味をもつ（たとえば「社会科学総合辞典」新日本出版社、一九七二）。

したがつて、マルクスのこの「資本と労働との対立は止揚されている」という叙述を、この本の筆者が、もし

かりに「資本と労働の対立は廃止（廃棄）」という意味に理解したうえで「協同組合」は「雇う・雇われる」関係を克服し、……資本と労働との対立を廃止する」（本書一三一～一三二頁）と叙述したのだとしたら、資本主義社会のもとでの協同組合についてのマルクスのこの指摘の一重の意味の一面をしか説明しなかつたことになるのではないか。

さらに重要なのは筆者がここで引用しているマルクスの「資本論」のこの部分の同じパラグラフのすぐあとにつづくマルクスのつぎの指摘である。

「資本主義的株式企業は、協同組合工場と同様に、資本主義的生産様式から結合的生産様式への過渡形態とみなされるべきである」（傍点は明野、社会科学研究所版⑩七六四頁、全集同卷五六一頁）。

（）でマルクスが「結合的生産様式」とよんでいるのは、あきらかに、社会主義経済制度のことであるが、マルクスが協同組合工場と「同様に」、資本主義から社会主義への「過渡形態」としているこの「資本主義的株式企業」についてエンゲルスは一八七八年に出版した『反

デューリング論』の第三篇「社会主義」のなかでつぎのように書いていている。

〔大規模な生産施設や交通通信施設が、株式会社に、国家的所有に転化される〕ことはこの目的のためには（このように大規模な近代的生産力を管理していくためには——明野）ブルジョアジーはいなくともよいとうことを示すものである」（全集第二〇巻二八七頁、国民文庫四九九頁）。

つまり、資本家は「資本と労働」という形態（形式）のうえでは「廃棄され、否定され」ているといふのである。

ところがエンゲルスはつづけている。

「しかし、株式会社への転化も、国家的所有への転化も、生産力のもつ資本という性質を廃止するものではない」（同上、同頁）。

つまり、生産力のもつ資本という性質の点では「保存され、高められ」（社会主義社会にむけて『準備され』）しているというわけなのである。

したがつてマルクスが「資本論」で指摘しているのは「協同組合」もこの「資本主義的株式企業」と「同様に」「形態においてにすぎないとしても」「過渡形態とみ

なされるべきである」ということにほかならない。

ところが、マルクスの『資本論』の第三巻二七章のこの指摘の部分については筆者はこの本ではなぜか引用も、言及もしていないのである。

協同組合の「大きな功績」（マルクス）とは なにか

マルクスもレーニンも協同組合運動が資本主義社会ではたず役割の限界とともに、その「大きな功績」「偉大な実験的価値」をその積極的な側面として正当にも評価していた。

マルクスはすでにみたように、「ジュネーブ大会への個々の問題についての……指示」（一八六六年）のなかで、協同組合が「資本と労働との対立を廃止する」ことで、協同組合が「大きな功績」という積極面をもつていていることをも指摘していた。

そしてマルクスはその二年前に書いた「国際労働者協会創立宣言」（一八六四年）のなかでは協同組合の役割の限界とともにその積極面について、「その偉大な実験

的価値は、いくら大きく評価しても、しすぎることはない」としてつぎのような三つの内容をいつそ具体的に示していた。

①「大規模にいとなまれる近代的な生産」設備では、労働者階級を雇用する「主人の階級がいなくともやっていけるということ」

②生産物を生みだすためには、生産設備は「働く人自身にたいする支配の手段、強奪の手段として（資本家に——明野）独占されるにはおよばないこと」

③「労働は、……やがては、自發的な手、いそいそとした精神、よろこびにみちた心で勤労したがう結合労働に席をゆずつて消滅すべき運命にあるということ」（全集第一六巻一〇九、国民文庫「マルクス、エンゲルス 労働組合論」三〇九）。

レーニンはマルクスのこの根本的見地をふまえたうえで、その四十数年のうち、資本主義が独占資本主義に移行した時代に、「コペンハーゲン大会のロシア社会民主党代表団の協同組合の決議案」（一九一〇年）のなかで、協同組合の役割の限界と積極面とをさらに明確にした。たとえば積極面についてはつぎの三つの内容をさらに具体的に示している。

〔①〕プロレタリア協同組合は、中間搾取をへらし、商品供給者のもとの労働条件に影響をあたえ、職員の状態を改善すること等々によつて、労働者階級がその状態を改善することを可能にする。

②プロレタリア協同組合は、ストライキ、ロックアウト、……その他のいっさいに援助をあたえることによつて、大衆的な経済闘争と政治闘争においてますます重要な意義をもつ。

③プロレタリア協同組合は、それが労働者階級の大衆を組織するときは、労働者階級に事業を自主的に運営し、消費を組織することをおしえ、将来の社会主義社会で経済生活の組織者の役割をはたせるよう、この分野で労働者階級を訓練する」（レーニン全集）（以下、全集）第一六巻二一八二頁）。

そこで、マルクスとレーニンが、社会主義への移行の以前に、資本主義社会のもとで、協同組合がどんなに大きな積極的役割をはたすことができるかについて、この間の、ほぼ半世紀にわたつて示してきたこののような原則的な見地にてらして、この本の筆者が協同組合の今日的役割をどのように説明しているか、つぎに考えてみるとしたい。

協同組合の「偉大な価値」を「実地に証明する」（マルクス）とはなにか

この本の筆者は、マルクスが協同組合の「偉大な功績」として、資本主義制度を社会主義制度に「おきかえることが可能だということを実地に証明する点」をあげた（「ジュネーブ大会への個々の問題についての……指示」一八六六年）ことについて、つぎのように説明している。

「全般的な社会変革の可能性（資本主義制度を社会主義制度におきかえる）ことが可能だということ——明野）を実地に証明するということはどういうことか。それは……」「政治権力の移行以前に」「資本にたいする隸属なしに自主的に……国民経済を運営する能力を実地に養成しておく」ということである」（傍点は明野、同書一九二一頁）。

なるほどレーニンはさきにみたよつに「権力の移行以前」の一九一〇年に独占資本主義のもとでの協同組合の役割の「二つの積極面」のうち三つ目に「協同組合は、……労働者階級に事業を自主的に運営し、消費を組織す

ることをおしえ、将来の社会主義社会で経済生活の組織者の役割をはたせるよう、……労働者階級を訓練する」と書いている。

しかし、レーニンが、マルクスが協同組合についての「偉大な実験的価値」（「国際労働者協会創立宣言」）や「偉大な功績」（「ジュネーブ大会への個々の問題についての……指示」）で示した原則的見地をふまえたうえで、独立資本主義の今日の社会での協同組合の積極的役割をそこでとりあげたのは、①「労働者階級の状態の改善に役立つ」、②「大衆的な経済闘争と政治闘争で重要な意義をもつ」、③「社会主義社会での経済生活の組織者へむけて労働者階級を訓練する」という三つの内容の全体である。したがって、この本の筆者が書いているように「権力の移行以前に」（つまり、資本主義社会のもとで）「国民経済を運営する能力を実地に養成しておく」ということだけではないのは明白である。

つまり、筆者の説明のよくな見地は、協同組合の「偉

大な功績」（マルクス）を“過大に評価する”というよりも、その逆に、マルクスとレーニンがきわめて長い歴史的時期を通じて理論的実践的に探求してきた協同組合運動の役割の限界とともに、その今日的な積極的役割

の、広く、深い意味を、きわめて狭い内容のものへ閉じこめてしまう結果になりはしないだろうか。

しかもレーニンは、資本主義社会の協同組合は「労働者階級を訓練する」が、そこで「労働者が獲得する技能」は、きわめて制限された「貧弱」なものであり、「なんら、決定的な変化をもたらさない」というその限界を、さきの「コペンハーゲン決議」（一九一〇年）より五年前、「イスクラ的戦術」の最後の言葉（一九〇五年）のなかで、つぎのように明確に指摘している。

「消費組合で労働者が獲得する技能が、非常に有益であることは争われない。だが、この技能を本格的にもちいる活動舞台をつくりだすことができるには、プロレタリアートへの権力の移行だけである」「権力がブルジョアジーの手中にのこっているあいだは、消費組合は……なんら重大な転換を保障せず、なんら決定的变化をもたらさず、ときには変革のための真剣な闘争から脇道へそらせざる」

（消費組合の）「有益な施設が適用される範囲は（労働者がうけると——明野）賃金の額が貧弱なために、どうしても貧弱な状態となる運命をもつてゐる」

「こうして消費組合は社会主義の一端ではある。弁証

法的な発展過程は、資本主義の限界内にさえ、実際に、新しい社会の諸要素を、その物質的・精神的諸要素に入りこませはする。だが社会主義者は断片と全体を区別することができないければならないし、断片ではなく全体を自分のストーカンとしなければならないし、……部分的なつくりい策に資本の変革の根本的条件を対置しなければならない」（傍点はレーニン、全集第九卷三九三—三九四六）。

協同組合は「社会の経済的改造に必要な社会的諸形態」（マルクス）の一つ

この本の筆者は第五章「雇う雇われる」関係を克服する、「社会の経済的改造に必要な社会的諸形態」（マルクス）という指摘が「何を意味しているのかよくわからなかつた」（同書八五六）と書いている。

このマルクスの指摘は、マルクスが、さきに紹介した「労働組合——その過去、現在、未来」（一八六六年）を書いた一年前、そして国際労働者協会（第一インター・ナショナル）が創立された（一八六四年）一年あとの六

五年に、ロンドンでひらかれた国際労働者協会の最高機

関である総評議会でおこなつた、講演「賃金、価格および利潤」（の原稿）のなかにふくまれてゐるつぎの部分のなかにある。

「労働者階級は資本の侵害にたいする抵抗……資本との日常闘争で……屈服するならば、彼らは、そもそももつと大きな運動を起こすことなど、とうていできなくなつたが、「それと同時に、……これらの日常闘争の究極の効果を過大視してはならない。……現在の制度は、彼らにあらゆる困苦をおしつけるが、それと同時にそれが社会の経済的再建に必要な物質的諸条件と社会的諸形態をも生みだすものであることを、彼らは理解すべきである」（傍点はマルクス、全集第一六卷一五三—一五四）。

国民文庫「賃金、価格、利潤」八七—八八（一八八六）。

ところがこの本の筆者はすでにこの本の「序章」でマルクスの『資本論』第三卷五篇第一七章「資本主義生産における銀行の役割」から「協同組合工場」の「偉大な実験的価値」をマルクスが示している箇所として「協同組合工場は、古い形態の最初の突破である」（社会科学研究所版⑩七六三）といふ部分を引用しているのである（同書一九六）。

しかし、この筆者が「資本論」から引用したこの同じ

パラグラフのすぐあとでマルクスはさきに紹介したように「これら協同組合工場の内部では、資本と労働との対立は止揚されている……形態においてにすぎないとしても」（傍点は明野）と書いたうえで、この同じパラグラフの最後のところではマルクスはさらに明確に「協同組合工場」は「資本主義的生産様式から結合的生産様式への過渡形態とみなされるべきである」（傍点は明野）と指摘しているのである。

このように「資本論」で協同組合工場が「形態においてにすぎない」が、資本主義制度から社会主義制度への「過渡形態とみなされるべきである」と指摘したマルクスは、それをふまえたうえでこの講演「賃金、価格および利潤」のなかに『先どり』して資本主義社会が「社会の経済的改造に必要な社会的諸形態を生みだすことを理解すべきである』とよびかけたのにほかならない。

この本の筆者がその「序章」で、「資本論」から引用したこの同じパラグラフについて、その最後のところまで、全体として、その意味を説明しようとしたなかつたのはなぜか、私にはわからぬ。^(注)

(注) マルクスは講演「賃金、価格および利潤」（一八六五年六月）から六ヶ月あとの一二月末に、ほぼ一〇年かけた経済学の

資本主義は協同組合のほかにどんな 「経済形態」を生みだすか

マルクスは「資本論」第三巻三六章の「信用・銀行制度」論のなかで「資本主義的生産様式が生みだすもつとも人為的でもっとも発達した産物である」「信用制度・銀行制度」についてつぎのように書いてている。

この制度は「社会のすべての利用可能な資本、また潜勢的でまだ積極的に使用されていない資本までも、産業資本家および商業資本家の自由な使用にゆだねるのであり、その結果、この資本の貸し手も利用者も、その所有者または生産者ではない。このようにして信用制度・銀行制度は、資本の私的性質を止揚し、こうしてそれ 자체、しかしまだそれ自体でのみ、資本そのものの止揚を含んでいる」「この銀行制度とともに、社会的規模での生産諸手段の一つの一般的な記帳および配分の形態が、

研究の成果を「資本論」全三巻の草稿として書き上げることができた。戦後の日本でもこの講演がマルクス経済学の入門書としてよく読まれてるのは「資本論」全三巻の体系の要点が簡潔に先取りされているからである。

ただしその形態だけが与えられるのであるが」（傍点は明野、社会科学研究所版⑪一〇六三頁、全集第三五卷(b)七八二一~七八三頁）。

つまり、マルクスは、資本主義が、協同組合とは別に社会主義が必要とする銀行制度という「社会的規模での生産手段の記帳や分配」の機構を経済「形態」としては用意していると指摘しているのである。

しかもマルクスは、この銀行制度という経済「形態」にしても、それが資本主義から社会主義への移行の「有力なテコ」とはなるが、「大きな有機的諸変革の一要素」にすぎない、と明確に限定してつぎのように書いていいる。

「資本主義的生産様式から結合された労働の生産様式への移行の時期に、信用制度が有力な横杆として役立つであろうことは、なんの疑いもない。とはいっても、それはただ、生産様式自体の他の大きな有機的諸変革と連関する一要素でしかない」（傍点は明野、同上書一〇六四頁、同全集同卷七八三頁）。

レーニンはマルクスとはちがつて、資本主義が独占資本主義、帝国主義に発展した時代に、資本主義から社会主義への移行へむけて歴史上はじめて実際に挑戦するな

かでマルクスのこの基本的見地を厳密にひきついだ。そして、銀行や協同組合の役割についても、一九一七年の一〇月社会主義革命の前夜にも、またその直後にも、正當にもつぎのように位置づけている。

レーニンはまず「ボリシェヴィキは権力を維持できるか」（一九一七年一〇月一日）で「社会主義革命に必要な力が、しかもわれわれが資本主義から引きあがつた形でひきづぐ」「すでに十分の九まで社会主義的な機関」として「物資の生産と分配との全国的な簿記、全国的な記帳」を行う「全国的銀行」をあげるとともに、資本主義がつくりだした「記帳機関」のなかに、大銀行に準じるものとして「シングルート、郵便」などとともに「消費組合」をあげている（傍点はレーニン、全集第一六卷九六頁）。

また「戦争と講和についての報告」（一九一八年三月）では、一〇月社会主義革命後の実践のなかから、社会主義が資本主義からひきつける「最も発達した形態」として「記帳の組織、巨大企業の統制、国家経済機関全体」を確認し、それを「一つの巨大機構に、数百万、数千万の人々が一つの経済計画に指導されるよう仕方で活動する経済的有機体に転化すること」を「巨大な組織上の

任務」として提起している（傍点は明野、全集第二七巻

一年三月刊、一一二一頁）。

八四一）。

こうしてマルクスもレーニンも、資本主義が社会主義に必要な経済形態として大銀行や協同組合などを生み出すことを指摘したが、協同組合だけをほかのいずれかより優位におくということはまだしていない。だが、労働者階級が国家権力を実際にぎつたあとではレーニンはどうであったか。

労働者階級が国家権力をにぎつたあとでの 協同組合

レーニンが一〇月革命のあとで社会主義建設に正面からとりくんだ時期を、不破哲三氏は論文「ソ連問題と日本共産党の立場」（『赤旗』一九九一年一月一八日付）のなかでつきの二つの時期に区分している。

つまり、「第一回は、内戦や干渉戦争がはじまる前の一九一八年のこと」「第二回は、内戦が終わって平和をとりもどしてから、レーニンが病氣でたおれるまでの、一九二一年から二三年の初めにいたる時期」である（『ソ連・東欧問題と現代の世界』、新日本出版社一九九

そして不破氏は、この二つの時期の経済建設の計画をくらべ、「共通点もかなり多いが、大きくちがう点もある」としたうえで、つきのように書いている。

「そのちがいのなかで一番きわだっているのは、計画経済と市場経済の結合という構想で、これは革命初期の計画にはなかつたものです。やはり革命後何年にもわたるさまざまな苦労をへて、いろいろな失敗をしたりした上で、レーニンはこの道をふみだしたわけです」（同上書一二三一頁）。

レーニンが、その「いろいろな失敗」からひきだした教訓と新しい達成から、日本の協同組合運動が、今日、なにを学ぶべきかを、十分に研究する必要があることはいうまでもない（たとえば、松竹伸幸氏の研究論文「レーニン＝社会主義経済建設の探求」『前衛』一九九四年四月一六月号など）。

しかしレーニンが、この「第二の時期」に「新経済政策」、いわゆるネップという名で私たちの記憶にも生きしい方針をうちだし、そのもとで、「国家権力が労働者階級の手ににぎられた以上」すべての住民を協同組合に組織していくところに、社会主義への大道があるとの

展望をあきらかにしていることだけは、ここで確認しておく必要がある。

レーニンはその知的活動の『最後の時期』に、公表を予定して口述した論文の一つ「協同組合について」（一九二三年一月六日）のなかで、つぎのように書いてい

る。

「實際、わが国で國家権力が労働者階級の手ににぎられた以上、すべての生産手段がこの國家権力のものとなつた以上、われわれにのこされた任務は、ほんとうに、住民を協同組合に組織することだけである。協同組合への住民の組織化が最大限におこなわれている条件のもとでは、……社会主義が、ひとりでにその目的を達成する」（傍点は明野、全集第三三卷四八七頁、国民文庫『労農同盟論3』一三四—一三五頁）。

そのうえでレーニンは、同じ論文の後半の部分でマルクスやエンゲルスが、その時点から七〇年以上も前に、空想的社会主义者たちの思想体系を、正当にも批判していくことにたちかえり、「ロバート・オーエン以来の古い協同組合活動家の諸計画の空想性は、どういう点にあるのか」という問題をあらためて念をおすよつに提起しているのである。

むすびにかえて——「協同組合的」社会主義（レーニン）の誤りはどこにあるか

マルクスやエンゲルスは、そしてレーニンも、貫して、空想的社会主义者たちの思想体系や協同組合運動の「偉大な実験的価値」や「大きな功績」などを正当にも高く評価してきたが、どんなときにも協同組合主義者であつたり、ましてや協同組合至上主義者であつたことなどはなかつた。

マルクスとエンゲルスは、すでに『共産党宣言』（一八四八年）のなかで、サン・シモン、フーリエ、ロバート・オーエンなどの体系は「プロレタリアートとブルジョアジーのあいだの闘争の最初の未発展の時期」「プロレタリアートがきわめて自分自身の地位をまだ幻想的に理解している時代にあって、社会の全般的な改造へのプロレタリアートの最初の、予感にみちた衝動に照應している」と歴史的な位置をあきらかにしたうえでつぎのように特徴づけた。

「それらは、現存する社会のすべての基礎を攻撃す

る。したがつてそれらは労働者の啓蒙のためのきわめて価値のある材料を提供した。……たとえば、都市と農村との対立の……私的経営の、賃労働の廃止の……それら諸著作のこれらすべての命題は、階級対立の除去を表現するためのものにはかならない」（新日本文庫八九^バ、全集第四卷五〇五^バ）。

それとともに「彼らは、小さな、……実験によって、実例の力によって、新しい社会的福音に道をひらこうとこころみる」（同文庫八八^バ、同全集五〇四^バ）、「階級闘争のこの空想的超越、階級闘争の空想的克服は、あらゆる実践的価値、あらゆる理論的根拠を失う」（傍点はいすれも明野、同文庫八八一八九^バ、同全集五〇四一五〇五^バ）と明記していたのである。

この「共産党宣言」から七五年後の一九二三年はじめ、労働者階級が世界史上はじめて実際に國家権力ををぎったあとで、レーニンはその“最晩年”に、あらためて「ロバート・オーエン以来の古い協同組合活動家の諸計画の空想性」への一貫した批判の正当性を、さきにみた論文「協同組合について」のなかでつきのように再確認している。

「私の考え方を説明しよう。ロバート・オーエン以来の

古い協同組合活動家の諸計画の空想性は、どういう点にあるのか？ それは、彼らが階級闘争、労働者階級による政治権力の獲得、搾取階級の支配の打倒というような基本的問題を考慮しないで、社会主義による現代社会の平和的改造を夢みていた点にある。だからこそ、この「協同組合的」社会主義を、住民をたんに協同組合に組織することによって階級敵を階級協力者に転化……することができるという念願を、まったくの空想、なにか口マンティックなもの、卑俗でさえあるものと、われわれが見なすのは、正しいのである。

現代の基本的任務という見地からみて、われわれが正しかつたことは疑いない。なぜなら、国家の政治権力を獲得するための階級闘争がなければ、社会主義は実現できないからである」（傍点は明野、全集第三三卷四九三^バ、国民文庫「労農同盟論3」二四二^バ）。

このようにマルクスとエンゲルス、そしてレーニンの「協同組合的」社会主義にたいする原則的批判の見地は一貫している。

ところがこの本の筆者は、協同組合運動が資本主義のもとで「資本と労働との対立を廃止する過程」に決定的な役割をあたえ、これをぬきにしては、かりに「国家権

力の移行」が実現しても「旧ソ連・東欧諸国のような結果」になるだけだ、としてつぎのように書いている。

「(協同組合運動は)明野)『雇う・雇われる』関係を克服し、資本と労働との対立を廃止する過程で、……

協同組合企業の組織のあり方、さらには産業の組織のあり方を変えていく必要があり、労働者自身が企業・産業・経済を自主的・民主的に運営していく能力を身につけていくことが重要である。このようなことなしに、国家権力の移行によって資本主義的企業が国有化したとしても、……その国有企业に労働者が雇われるようになるだけであり、国家資本と労働者とのあいだに『雇う・雇われる』関係が存続するだけである。旧ソ連・東欧諸国のはあい、「革命」によってこのよくな結果となつたにすぎない」(傍点は明野、同書一三二一—一三三六)。

これは協同組合運動の重要な意義と役割を強調するあまり、レーニンが“最晩年”にも再度強調した「国家の政治権力の獲得がなければ社会主義は実現できない」という「国家権力の移行」の決定的意義を軽視する結果になるのではないか。

それはまた、第一次世界大戦のさなかにロシアでおこった社会主義革命が、労働者階級による国家権力の掌握

によつて、レーニンが指導にあつた時期には、その歴史的な制約や、少なくない試行錯誤にもかかわらず、科学的社会主义の真価を発揮したさまざまな業績やその世界の進歩への貢献を過小評価することにもつながるのではないか。

なぜなら、この「革命」のこの時期の業績や貢献の人類史的な意義は、スターリンらのその後の歴代指導者の誤りの累積や、その結果おこつたソ連の崩壊などによつても、決して失われるものではないからである。

また「旧ソ連・東欧諸国」の崩壊についていえば、それがこの本の筆者が書いているように、「権力の移行」以前に協同組合運動によって「労働者自身が、企業・産業・経済を自主的・民主的に運営していく能力を身につけていく」と「なし」の「国家権力の移行」などによるものではないことはいうまでもない。

この崩壊は、レーニンの死後、スターリンを中心とした指導部とその後継者たちが、科学的社会主义にそむき、対外的には霸權主義、国内的には官僚主義・専制主義の誤った道をすすんだ結果ひきおこされたものであることは今日ではすでに明白であるからである。